

中国仏教における儀礼の研究

学位論文内容の要旨

本論文は、六朝時代から宋代までの仏教儀礼を考察の対象とし、以下の10章で構成されている。

第1章から第4章までは中国六朝時代の南朝の齊・梁・陳の三代の仏教を扱う。

第1章「六朝における仏教儀礼の思想的基盤」においては、梁の武帝(501-549 在位)と沈約(441-513)の思想や実践を取り上げて検討し、三世輪廻や因果応報の思想が六朝士大夫の間に一種の畏怖をもって受容されていたことを確認している。

第2章「六朝仏教における齋会の諸相」では、当時の中国人仏教者や在家信者が実践した八關齋や齋会の記述を検討した。衛士度(3c 後半～4c 初)や沈約に関する記述から六朝時代には八關齋が一般化していたことを明らかにした。

第3章「『広弘明集』所収の懺悔文・願文について」では、六朝時代の皇太子・士大夫および皇帝が実践した大規模な法会(千僧会・捨身等)における懺悔文や願文を中心に、その法会を行なう意義や功德を検討している。願文等の中には、それぞれの立場を反映した文言が見られ、皇帝ならば国の為政者として「一切衆生の救済」という表現が強調されている。また、「経名を付した懺悔文類」は、これを検討してみると、齋会・八關齋に係る懺悔文・表白文であると考えられるとしている。

第4章「蕭子良『浄住子浄行法門』における供養」では、後の道宣(596-667)が布薩法と位置づけた南齊・蕭子良(460-494)『浄住子浄行法門』における実践の一端として「奉養僧田第二十七」を中心に検討を加えている。そこでは、僧侶とは福田であり、応供であって、布施という行為が成立するのも僧侶がいるからであると説明されている。

第5章から第7章では隋唐代の仏教儀礼について検討している。

第5章の「隋唐代における懺法の諸相」では、智顗(538-597)撰述とされる懺法類を概観した上で、その他の懺法類との関わりについて検討している。特に『法華三昧懺儀』は、見仏・開仏知見・入菩薩位を目指すとしている。この菩薩行に基づく懺悔は、後代の懺法類に多大な影響を及ぼしているが、『集諸経礼懺儀』に収録される儀礼にも天台の形式が踏襲されている。この検証によって当時の礼懺儀式の構成形式の一つが明らかにされた。その他『慈悲水懺法』で説かれる七種心にも天台懺法の影響が見られ、善導(613-681)の『往生礼讃偈』の三品の懺悔にも真摯な懺悔の姿勢を窺うことができる。

第6章「隋唐代における施食会・齋会について」では、はじめに智顗が実践した放生・施食の資料に検討を加えている。その結果は次の通りである。智顗は『金光明経』を講じ、天台山麓に放生池を設置して放生を実践したが、彼は放生も衆生救済の菩薩行であるとす

る。また師の慧思(515-577)は、食事の際に六道の一切衆生にまで施食すると観想することを勧め、布施波羅蜜の完成を期すのであるが、智顗も同様に食の布施がそのまま六波羅蜜の修行であり、さらに「観心」によって食事を法身を養う般若の食にまで高めねばならないと説いている。

次に道宣の『四分律行事鈔』に対する検討では、道宣は人から飲食の施しを受けて生きる僧侶は、施主が福德を得るために法施や祈願をしなければならないことを強調し、また「五観の偈」を通して、食に対する僧侶の在り方、供養を受けるに相応しい僧侶の在り方を示しているとする。

さらに次の資料として『国清百録』と『入唐求法巡礼行記』の齋会の記述を検討している。その結果として、設齋の目的は、受戒会・葬送儀式・年忌法要・降誕祭など様々であったことが知られたとする。

第7章「受八戒儀における懺悔法について」では、在家信者が布薩会に参加するための受八戒儀の懺悔の特色について検討している。敦煌写本の P2849、S543（背面）、S4081 を検討比較した結果、それらの中には従来名称のみであった十不善業の懺悔が具体的に文章化され、「不飲酒」の項目に肉と五辛を食すことも含めて禁止するような変化が見られ、また、それらの懺悔文には經典の引用や譬喩を用いていることから、多くの在家信者を仏道に帰入させようとした教団の意図が窺えるという。

第8章から第10章においては宋代の仏教儀礼を扱っている。

第8章「宋代の仏教儀礼の概要」では、宋代に盛行した仏教儀礼について概観する。この時代に施餓鬼会が流行したのは、施餓鬼を行った功德によって自身もまた功德を得るという現世利益的要素を含んでいたことが一因として挙げられる。また水陸会は、六道の一切衆生を救済できる勝会であるということで、先祖供養の一環として広く盛行したと考えられるという。

第9章「遵式における施食思想とその実践」では、遵式(960-1032)の儀礼に関する思想を検討している。遵式は先祖供養などで犠牲を供物にする中国在来の祭祀を改めて(改祭)、仏教的な祭祀(修斎)を説いている。彼の「改祭修斎」の思想は、第一に殺生を禁ずることであり、その根底には梁武帝以来の大慈悲心が据えられている。その上で、梁武帝に仮託される施食思想を巧みに取り入れることによって、改祭の権威付けを図るのである。また遵式は、施食の実践において「観心」を重視した。その観心とは、検討の結果、天台の慧思や智顗の思想や実践によるものであることが明らかになったとする。

第10章「宋代における施食会の展開」では、宗曉(1151-1214)『施食通覧』の収録文献に基づいて、施食会の展開の道筋を明らかにするために、施食会の起源・施食の経証・事跡の内容について整理検討している。水陸会文献群についての検討結果では、それらに記載されている水陸会の起源については、みな一様に梁武帝に仮託していることが知られ、その法会実施の目的は一切衆生の救済で、施食の対象が餓鬼から六道四生の衆生にまで広がっている。宗頤、蘇軾、楊鏐らの文献では、施食の対象として上堂八位と下堂八位の各々を勧請して施食供養を行っていることが確認されるとする。

また、七世父母の救済を説く『盂蘭盆経』や『冥詳記』中の先祖供養の話などは、中国人の「孝」と「家」の思想に結び付いており、水陸会が先祖供養の重要な儀式となる契機となったことが指摘できるという。

以上のような検討の結果、以下のように結論をまとめている。すなわち、中国六朝時代

に千僧会などの大法会が行われたその根底には、士大夫の六道輪廻、三世応報思想の受容があり、人間の生を現世のみに限定する従来の考え方と異質なこの仏教思想に対して、懺悔による罪障消滅、贖罪の思想を生み出し、次の時代のさらなる懺悔思想の深化へと進む原動力となった。懺悔思想の深化と純化は智顗にその例を見いだすことができる。智顗は懺法の究極に見仏と菩薩行の実践を見た。これは懺悔することが自体が菩薩行、すなわち衆生救済に直結することになるわけである。この思想は後代の懺法類等に大きな影響を与えた。

一方、慧思以来の徹底した布施波羅蜜実践の意識は、宋代の施食会（施餓鬼会・水陸会）に発展する思想的要因の一つといえよう。

さらに、水陸会の法会は、中国人の先祖崇拝の意識を巧みに取り込んで仏教的な先祖供養の儀式として成立していることが指摘できる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 藤 井 教 公

副 査 教 授 細 田 典 明

副 査 教 授 佐 藤 鍊太郎

学 位 論 文 題 名

中国仏教における儀礼の研究

本論文を審査の結果、その研究成果は以下の3点に要約することができる。

1) 従来の仏教儀礼研究が、扱う時代範囲も限定的であったり、その対象も個別の儀軌や事相に止まっていたが、本論文は儀礼の根底にある思想にまで踏み込み、また時代範囲も六朝から趙宋代までを通時的に扱って、荒削りではあるが、各時代に出現した仏教儀礼の根底に流れる中国人仏教者の思想を思想史的に捉えることに成功している。これは従来になかった新しい成果である。

2) 資料文献の内容に関して、本論文が提示した新しい知見として、

①『広弘明集』所収の「経名を付した懺悔文類」は、斎会・八閏斎に関係する懺悔文・表白文であろうと比定したこと。

②『集諸経礼懺儀』に収録される儀礼や『慈悲水懺法』に説かれる七種心にも天台懺法の影響が見られることが明らかになり、当時の礼懺儀式の構成形式の一つが明らかにされたこと。

3) 思想的に示しえた新知見として、

①遵式の重視した「観心」に慧思・智顗の影響が見られることを指摘できたこと。

②水陸会の法会が中国人の先祖崇拜の意識を巧みに取り込んで仏教的な先祖供養の儀式として成立していることが指摘できたこと。

などである。

本論文は文章叙述についてやや粗い点があるが、そのことは内容を損なうものではなく、文献資料においても思想的にも従来にない新知見がを提示されており、高く評価することができる。また、中国六朝から宋代にまたがる長期的な時代の流れの中で、仏教儀礼の根底にある思想の流れを思想史として捉えようとしている点も評価できる。よって改善すべき点も見られるが、本審査委員会は全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判定した。